SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

コンペティション

2021 年／スペイン・アルゼンチン映画
配給：ショウゲート／114 分

2023（令和 5）年 3 月 24 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－３７

監督：ガストン・ドゥプラット／マリアノ・コーン
出演：ペネロペ・クルス／アントニオ・バンデラス／オスカル・マルティネス／ホセ・ルイス・ゴメス／マノロ・ソロ／ナゴレ・アランブル／イレーネ・エスコラル／ピラール・カストロ／コルド・オラバリ／フアン・グランディネッティ

みどころ

映画製作をネタにした邦画の名作は『蒲田行進曲』（８２年）だが、アルゼンチン出身の監督コンビが、スペインの至宝ペネロペ・クルスとスペインの名優アントニオ・バンデラスを初共演させて、そんな本作を！「ライバル」として彼に絡むのは、アルゼンチンの名優オスカル・マルティネスだが、女流監督はまさに“水と油”の２人の俳優をいかに演出？

もっとも、本作で描かれるのは監督と２人の俳優とのリハーサル風景だけ。しかし、９回も繰り返されるそれは、まさにハプニングの連続でメチャ面白い。クランクインの２日前には、ある“とんでもない事件”も！

しかして、映画の完成は？それは心配無用。映画作りとは何とも便利なもの。『影武者』（８０年）だって、『仮面の男』（９８年）だって、ちゃんと完成しているじゃないの！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

▪▫■映画製作とは？芸術？エンタメ？その前にまずカネ！■▫▪

映画作りは芸術！日本が世界に誇る巨匠・黒澤明監督の映画作りは正にそれだ。他方、私の大好きな米国のクエンティン・タランティーノ監督の映画作りは、徹底的に“映画はエンタメ”という考え方に基づいている。それに対して、ある時期から監督に転身し、長い間、俳優と監督の“二刀流”を実践しながら、“映画は芸術だが、同時にエンタメだ”と“芸術とエンタメの二刀流”を実践しているのがクリント・イーストウッドだ。

しかし、本作冒頭、製薬業界トップに君臨する大富豪（老人）が功成り名遂げたうえ、腐るほどのカネを持った今、「自分の名前を後世に残したい」という気まぐれ（？）の中で、思い立ったのが映画製作。それも「ただの映画じゃない、偉大な作品を作る」と宣言したから、アレレ。映画製作ってそれでいいの？こんな男のこんな発想の下でホントにいい映

画が作れるの？誰もがこの男に反発し、そう思うはずだが、机上の空論ではなく現実論に立つと、映画製作には膨大なカネがかかるから、映画は芸術？それともエンタメ？という議論をする前に、まずはカネだ！

アルゼンチン出身のガストン・ドゥプラットとマリアノ・コーンの監督コンビは、まず本作冒頭でそんな悲しい（？）映画作りの現実を皮肉タップリに提示することに！

■□■監督の選定は？出資者と監督の打ち合わせは？■□■

侍ジャパンは、２０２３年のWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）で、全戦全勝の完全優勝を成し遂げたが、その監督として大きな役割を果たした栗山英樹は、どうやって監督に選定されたの？それはさまざまな形で報道されているが、本作で「ただの映画じゃない。偉大な作品を作る」ためのプロジェクトにローラ・クエバス監督（ペネロペ・クルス）が選定されたのは、側近とのちょっとした会話とアドバイスによるものだ。そもそも、カネ儲けはうまいけれども、芸術面には全く関心のないこの老人は、ローラ監督が取材を全く受けない変わり者ながら、映画賞を総なめにしている、今最も注目されている監督、ということすら知らないはずだ。

したがって、続いて登場する、出資者の老人と監督に選任されたローラとの打ち合わせのシークエンスもかなり奇妙な風景になる。口達者なローラ監督は、出資者からの「どんな映画に？」との質問に対して、ノーベル賞を受賞した小説『ライバル』を原作にすることを説明したが、老人はその原作を読んだこともないうえ、読む気もないようだから、アレレ。もっとも、よく考えてみれば、それ（つまり、カネだけ出して口を出さないやり方）は悪いことではないかもしれない。黒澤明を監督に起用するについては、多分そんなやり方がベストだろうから、ローラ監督を起用するについても、結果的にはこの老人のやり方がベストかも？

この２人の打ち合わせでは、ストーリーだけでなく、兄弟役として主演する２人の男優についても、ローラ監督の興味深いアイデアが披露されるが、それについても老人はローラ監督に全面的にお任せらしい。こうなれば、新作映画『ライバル』の製作については、ローラ監督が唯一無二の絶対的な権限を獲得？

■□■ローラ監督と２人の主演男優との脚本の読み合わせは？■□■

１９７４年生まれの女優ペネロペ・クルスは、長い間“スペインの至宝”と呼ばれている美人女優だが、５０歳になった今、本作ではこんな絶対的な権限を持った女性監督ローラ役をものの見事に演じている。本作の衣装はすべてシャネル製らしいが、それがすべてのシーンでピッタリ決まっているから、それにも注目！

そんなローラ監督と新作映画『ライバル』で兄弟役を演じる２人の男優とのリハーサル風景は緊張感いっぱいで面白い。兄役を演じるイバン・トレス（オスカル・マルティネス）は格式高い演技で知られる超一流のベテラン俳優。それに対して、弟役を演じるフェリックス・リベロ（アントニオ・バンデラス）はエンタメ作品で世界的に人気を獲得した大ス

ター。つまり、この２人は、キャリアから演技メソッド、さらには私生活まで全く真逆のタイプで、ハッキリ言って、水と油だから、果たして、この２人の“共演”はうまくいくの？ちなみに、黒澤明監督は、『影武者』（８０年）の撮影で衝突した大スター勝新太郎を主演から外し、代わりに仲代達矢を起用したが、本作での２人の共演は大丈夫？ローラ監督は、それを十分承知のうえで、むしろ２人の緊張感がプラスになるはずと企んでいたわけだが、さて・・・？

脚本の読み合わせというリハーサル風景は、第７４回カンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞した濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』（２１年）（『シネマ４９』１２頁）にも登場していたが、あれは“濱口メソッド”に基づくものだった。それに対して、本作に見る“イバン・メソッド”と“フェリックス・メソッド”との相違は？日本の俳優を見ても、一般的に劇団出身者は役柄の分析に重点を置くタイプが多いが、歌手から俳優に転身した人気者の演技は感性やひらめきに重点を置くタイプが多い。イバンとフェリックスの違いもそれと同じようなものだが、リハーサルの初日から２人がそれで対立するのはまずいのでは？

ついつい私はそんな要らざる心配をしてしまったが、ローラ監督はそんな心配などお構いなしに、今度は、天下の俳優フェリックスに対して、「こんばんは」のセリフを何度もトライさせたうえ、「ダメよ。何かが違う」とマウントをかけてきたからすごい。さらに２回目のリハーサルでは、イバンに対して泣く演技を求め、イバンが「本番でやる」とそれを拒否すると、「見ないと演出できない」と迫ったから、これもすごい。ここまで天下の名優２人に対して高圧的な演技指導（演出）ができるのは、あの無知な出資者の信頼のお陰だが、大ゲンカ寸前になるまで、こんなリハーサルを続けて大丈夫なの？ガストン・ドゥプラットとマリアノ・コーンの監督コンビが、ローラ監督を通じて演出する、こんな新しい映画製作のリハーサル風景を、本作中盤ではしっかり楽しみたい。

■□■ここまでやるか！３人のプロの“やり口”にビックリ！■□■

諸葛孔明は当時の気象予報士だったから、「赤壁の戦い」では、あらかじめ東南の風が吹くことを予測した上で火攻めの計を決行した。しかし、黒澤明監督は、撮影のために必要な嵐が吹くまでスタッフと俳優陣を待機させ続けたそうだからビックリ！嵐が来なければ撮影は翌日に持ち越しだから、そこでの損失はHow much？

ローラ監督は女性ながら、そんな“世界の巨匠”クロサワと同じような演出が得意らしい。その一つとしてローラ監督はある日、物語の重みを感じながら演じさせるため、天下の名優２人に、「クレーンで吊り上げられた５トンの岩の下で演じろ」と命じたからすごい。そんな“エクササイズ”にもビックリだが、さらに驚くのは、ある日ローラが２人に対して、賞でもらったトロフィーを持ってくるように命じたこと。それは何と、身動きできないようにサランラップでぐるぐる巻きにされた２人の目の前で、そのトロフィーを次々と粉砕機に投げ込む、という“暴挙”のためだったからすごい。そんな仕打ちに「ざけんな、

ビッチ！」と思わず罵るフェリックスに対して、ローラは平然と「テーマは“転換”よ」と応じていたから、それもすごい。

そんな仕打ちを続けるローラに対するフェリックスの反撃は、ある重大な嘘（の告白）。その内容とあっと驚く展開は見てのお楽しみだが、それにすっかり騙されたローラとイバンに対して、フェリックスは、それは自分の名演のなせる技だと開き直ったから、こちらもすごい。まんまとフェリックスの真に迫った演技に騙され、振り回されたローラとイバンはまさに怒り心頭！すると、それを根に持った（？）ローラとイバンの、フェリックスに対するプロらしい反撃は？

■□■ついに大事件が勃発！映画の完成は？■□■

プロデューサーは無名だが、大枚をはたいて有名監督を招聘し、「好きにやっていい」という条件で、性格が正反対の（水と油の？）２人の俳優を兄弟役に起用した新作『ライバル』は話題沸騰！本作中盤で描かれるのは、ローラ監督と２人の主役による計９回のリハーサル風景だけだが、映画の完成に向けては、その他大勢のスタッフが全力を傾注したのは当然だ。

しかして、クランクインを２日後に控えた今日は、盛大なパーティーの日。華やかな会場には、例によってシャネルの衣装に身を包んだローラ監督を中心に多くの人が集まっていた。しかし、１人イバンだけは荒れていたからアレレ・・・。これはローラからフェリックスの今回のギャラが自分の数倍も多いと聞いてしまったためらしい。イバンほどの名優でも、やっぱりギャラには固執するの？また、情報公開が叫ばれている昨今、野球界では、大谷翔平の２０２３年の年収が６５００万ドル（約８５億円）、今年大リーグに移籍した吉田正尚が５年総額で約１２０億円と公表されているが、映画界では『ライバル』ほどの話題作でも主役のギャラは秘密事項なの？

それはともかく、普段から怒りを外に出さず内に秘めてしまうタイプのイバンが、ギャラのことでこれほど怒り狂うのは私には意外だったが、その後会場で起きた“あっと驚く事件”は、まさに“あってはならないこと”だったから大変！そのサマは、あなた自身の目でしっかりと！

■□■それでも映画は完成！その主役は？記者会見は？■□■

本作の話題は、何と言ってもペネロペ・クルスとアントニオ・バンデラスとの共演。そしてガストン・ドゥプラットとマリアノ・コーンの監督コンビによる本作の“売り文句”は、「現代映画界を爽やかに皮肉った業界風刺エンターテイメントが日本上陸！誰もが憧れる華やかな映画業界の裏側で本当に繰り広げられているかもしれない、天才監督と人気俳優２人の三つ巴の戦いを描き、アイロニカルでスタイリッシュな傑作が誕生した。」だ。

本作は、リハーサル風景だけを追ったものながら、そんな“売り文句”に十分値する皮肉タップリの面白いストーリーが続いていく。フェリックスは何でも表に出るタイプだから、前述のように、ローラもイバンもフェリックスがついたある“重大な嘘”に完全に騙

されてしまうストーリーには唖然。他方、イバンの方は内に秘めるタイプだから、アカデミー賞等の有力な賞をバカにしながら、一人鏡の前で受賞スピーチの練習をしている姿は皮肉いっぱいで面白い。そんな２人の現役最高の男優を女流監督ローラが５トンの岩の下で演技させたり、受賞したトロフィーをすべて粉砕機に投げ込んだりする演出も、誰もが「そりゃないだろう！」と思うほど迫力タップリかつ皮肉タップリだ。しかし、クランクイン２日前のパーティーで起きた、あの“あってはならない出来事”によって、そんな映画製作も遂に物理的に不可能に！

誰もがそう思ったはずだが、アレレ・・・。本作ラストは、ローラ監督の新作『ライバル』発表の記者会見のシークエンスになるから、それに注目！その主役はフェリックスだが、なぜフェリックス一人で兄弟間の確執をテーマにした映画『ライバル』の公開が可能になったの？それは、例えば黒澤明監督の『影武者』（８０年）や、レオナルド・ディカプリオが一人二役を演じた『仮面の男』（９８年）等々を考えてみれば明らかだが・・・。

２０２３（令和５）年４月５日記